様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月　 ２ 日現在

機関番号：２１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３７０２８３

研究課題名（和文）ジェイムズ・ジョイスと東アジア中心の脱欧入亜論

研究課題名（英文）James Joyce and the De-Westernization and Re-Easternization of East Asia

研究代表者
伊東　栄志郎（Ito, Eishiro）

岩手県立大学・高等教育推進センター・教授

研究者番号：７０２４９２４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究「ジェイムズ・ジョイスと東アジア中心の脱欧入亜論」は、ヨーロッパ文化の異端者ジョイスの東洋との関わりを、日本を中心に考察した。極東地域、特に日本や中国がどのように英文学で言及され、表現されてきたのか。東アジアが英文学にどう影響を与えてきたのかを考察した。第１次大戦とモダニズムの関係、ジョイスとJ.D.サリンジャーの仏教的視点からの比較、ジョイスと黒澤明、「スター・ウォーズ」の因果関係、ジョイスの日本語・中国語の学習状況、俳句の影響、イエズス会教育の功罪等を研究した。交付を受けた5年間において、国際学会発表10件、学術雑誌掲載論文6件(内1件を韓国で出版)、図書出版2件という成果を上げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
脱欧入亜論という用語は陳腐なものかもしれない。だが、欧米中心に研究されてきたジェイムズ・ジョイスの研究方向としては新しい試みと言える。研究を開始した2014年は第一次大戦開戦百周年であり、まず第一次大戦期に、オリエンタリズムがジョイスはじめモダニスト作家たちにいかに影響を与えたかを研究した。2015年には仏教の影響と能の影響、2016年には黒澤明と『スター・ウォーズ』とジョイスの意外な関係、俳句の影響など、これまであまり研究されてこなかった様々な東洋的視点からジョイス作品を再考することで、ジョイス研究の脱欧入亜論を目指したのである。本研究が今後の日本の英文学研究の新たな指標となることを願う。

研究成果の概要（英文）："James Joyce and the De-Westernization and Re-Easternization of East Asia" is a research focusing on the relationship between James Joyce, a heretic of European cultures, and East Asia, especially Japan. How has the Far East, especially Japan and China been referred to and described in English literature? How has the East Asia influenced English literature? The researcher examined the following topics: the relationship between World War I and Modernism, a comparative study of Joyce and J. D. Salinger from a Buddhist perspective, the causation among Joyce, Akira Kurosawa and "Star Wars," how Joyce learned Japanese and Chinese, the Haiku influence and the merits and demerits of Jesuit education. During the five-year Scientific Research of Grant-in-Aid, the researcher gave ten presentations at international conferences outside Japan, published six academic articles (including one published in Korea) and two books.

研究分野：人文学

キーワード：ジェイムズ・ジョイス　英米文学　脱欧入亜論　俳句　仏教　モダニズム　日本語　中国語

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究者は、アイルランドに生まれ育ちながら、大学卒業後ヨーロッパに渡り、主として英語講師として生計を立てながら、故郷ダブリンを舞台に小説を書き続けたジェイムズ・ジョイスを30年以上研究してきた。最初は、アイルランドの歴史、文化などを中心に研究したが、ある時からジョイスが描いているのは、アイルランドの実情ばかりではないことに気がついた。ジョイスの描く20世紀始めのダブリンは実際よりも国際的で「開かれている」のである。2006年から「ジェイムズ・ジョイスとオリエンタリズム」、2009年から「ジェイムズ・ジョイスと東洋文化の系譜学」という題目で科研費助成をいただき、　従来ほぼ西洋的視点で研究され続けてきたジョイスを東洋的視点で研究してきたが、本研究は、その第三弾にあたるものである。研究者は、国際ジェイムズ・ジョイス・シンポジウム、北米ジェイムズ・ジョイス学会、国際アイルランド文学学会、韓国や中国開催のジョイス学会等、国際学会に積極的に参加し、ジョイスと東アジア、特に日本、中国との関わりを発言し続けている。

２．研究の目的

ヨーロッパ的視点中心のジョイス研究動向に敢えて脱欧入亜論というアジア的視点を入れることで、ジョイス研究がよりグローバルに展開するよう働きかけることを目指した。今後の日本人研究者の研究に世界的に注目が集めるために、ジョイス研究が東アジア的視点で行えるようにし、ジョイスという作家が日本人にとってより身近な存在にすることが目的である。

３．研究の方法

基本的な研究方法は、資料収集→研究→調査→論文作成→学会発表→フィードバック確認→論文加筆修正→報告書/論文掲載であった。研究の目的を果たすため、学会発表は原則海外で行なった。国内では、可能な限り東京の関東『フィネガンズ・ウェイク』研究会及び京都の関西『ユリシーズ』読書会、さらに中国九州四国ジョイス研究会等に参加し、発表当番をこなすかたわら、情報交換などをおこなった。2017年ダブリンでのサバティカル期間中は、ジョイスの母校ユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンで招聘上級研究員として研修しながら、ダブリンの『ユリシーズ』読書会、『フィネガンズ・ウェイク』読書会及びフィネガンズ・ウイークエンド学会、ダブリン・ジョイス・サマー・スクール、トリエステ・ジョイス・サマー・スクール、チューリッヒ・ジョイス・ワークショップに参加した。

４．研究成果

　科研費をいただいた五年間の研究内容、研究成果を以下に時系列順に記す。

(1年目) 第一次大戦開戦百周年にあたる2014年は、6月にオランダのユトレヒト大学で開催された国際ジェイムズ・ジョイス・シンポジウムで「第一次大戦とモダニズム：オリエンタリストたちの中のジョイス」と題して発表した。特に東洋文化・文学、特に日本の俳句・短歌がジョイスを含むモダニズム作家たちに与えた影響を考察した。第一次大戦期に、オリエンタリズムがジェイムズ・ジョイスはじめモダニスト作家たちにいかに影響を与えたかを論じた。文学史におけるモダニズムはロマン主義や既存の文体に対抗するべく1880年代に誕生した。まもなく勃発した第一次大戦への恐怖がモダニズム作家に新たな創作意欲を与え、第二次大戦までの1920年代、1930年代にモダニズムは隆盛を極めた。オリエンタルな要素を用いることで伝統的な欧米の文壇で異彩を放つモダニスト作家も多かった。それはアーネスト・フェノロサの日本や中国文学文化研究に始まり、欧米に紹介し、自らの作品にも日本文学や中国文学を利用したエズラ・パウンドやW．B．イェイツ、T．S．エリオットなどが代表的なモダニストである。上記の作家たちの活動は彼らと親しかったジョイスに影響を与えていた。ジョイスが作品を連載していたモダニズム雑誌、『エゴイスト』と『リトル・レビュー』は、モダニズム作品の他に日本の俳句、短歌、浮世絵などの紹介から、特に日本人研究者の支援を受けたパウンドによる李白、劉徹、曹植などの作品翻訳から列強の侵略を受けていた中国の現状を訴えるF．T．S.と署名された中国人らしき匿名の連載、さらにはパウンドの漢字入門まで掲載した。このことからも証明されるようにモダニズムとオリエンタリズムは深い関係があり、その影響がジョイスの作品にも散見される。若き日のジョイスが書いた詩　「私は軍隊の音が聞こえる」は正にそのような時代の流れを予期したように書かれており、日本の伝統的な詩法とも十分比較可能なのである。

　同年10月には早稲田大学開催の国際アイルランド文学学会日本支部年次大会の「ジョイスと世界文学」のパネルで「世界文学からみたジョイスと村上春樹」というテーマで発表した。本研究は、デヴィド・ダムロッシュの『世界文学とは何か』(2004)を手がかりに、世界文学という観点からジェイムズ・ジョイスと村上春樹を比較したものである。インターネット普及等により、世界文学の定義は大きく変化した。20世紀末まで「世界」とは欧米諸国が中心であったが、アジア・アフリカ諸国の文学も積極的に世界文学アンソロジーに含めようという傾向が出てきた。よい例がノーベル文学賞受賞者に占める非欧米作家の割合で、川端康成以降、徐々にではあるが日本や中国などにも受賞者が出始めたのである。ジョイスと村上は一見直接的なつながりはなさそうだが、両者は19世紀欧米小説、特にフランス、ロシア文学を中心に編集された「世界文学」を10代の頃にかなり熱心に読んでおり、文学的土台は共通している。村上はジョイス作品、特に『ユリシーズ』を読んでいることは彼の著作等から推察可能であり、『ユリシーズ』と『1Q84』を比較分析した。

(2年目) 2015年6月に大韓民国江南大學校で開催された第6回国際ジェイムズ・ジョイス学会

に招待され、「ジョイスとサリンジャー: 仏教への言及の研究」を発表し、ジェイムズ・ジョイスとJ.S. サリンジャーを東洋宗教、特に仏教の視点から比較した。言うまでもなく、ジョイスはヨーロッパの作家で、サリンジャーはアメリカ人作家である。両者は生前会ったこともなく、一方が他方に影響を及ぼすような直接的な関係はなかった。しかし、両作家はアイルランド・カトリックにつながりがあり、共にユダヤに関心があった。両者とも教会もしくはシナゴーグに帰属している意識が気薄で、(禅) 仏教やヒンズー教に近づいた。彼らは仏教を宗教だとみなしていたわけではない。ジョイスは戦争や争いを避ける「快い哲学」と考え、サリンジャーは啓蒙を探求する過程で、創作活動と禅の修行に共通点を見つけた。要するに、サリンジャーは「(両手ではなく) 片手の鳴る音」もしくは禅における突然の悟りの瞬間を描こうとした。それはジョイスの言う「エピファニー」の瞬間である。

同年7月英国ヨーク大学で開催された第39回国際アイルランド文学協会年次大会において「能舞台におけるジョイスとイェイツの和解」を発表した。本稿はジェイムズ・ジョイスとW.B. イェイツの関係を日本的視点から再考したものである。イェイツが日本の伝統文化・文学から影響を受けたことは周知のとおりだが、殊に能は『4つの舞踏家のための戯曲』創作の霊感を与えた。「此上無い詩とは書かれていないもの、もしくは無言で謡われたもの」と説明して発句 (短歌) を紹介した野口米次郎とアーネスト・フェノロサの翻訳と研究ノートを編集した秘書エズラ・パウンドから能を学んだ。ジェイムズ・ジョイスは『能 日本古典演劇の研究』を所有していた。この1916年出版の本はフェノロサ手稿とパウンド編注に基づく。ジョイスが自作劇『追放人』の出版社を探していた頃である。当時ジョイスは能に興味がなかった。『フィネガンズ・ウェイク』には能という言葉が数回登場するが、その頃までに彼には能に関する知識がもっとあった。聖パトリックの日本人化身が数回小説内に登場する。第4巻でその化身が中国人化した大ドルイド僧バークリーと共におそらく能舞台「養老」に登場する。イェイツは日本文学から簡潔さを学んだが、ジョイスが作品を日本語と日本史の複雑さと冗長さで豊かにしたと考察した。

(3年目) 2016年6月にロンドン大学で開催された第25回国際ジェイムズ・ ジョイス・シンポジウムで「ジョイス、黒澤明そして『スター・ウォーズ』:「モノミス」(*FW*581.24)」を発表した。本研究は、米人気SF映画『スター・ウォーズ』と黒澤明監督『隠し砦の三悪人』とジェイムズ・ジョイス作品を神話学者ジョセフ・キャンベルの『フィネガンズ・ウェイクを読み解く親鍵』(1944)と『千の顔を持つ男』(1949)で唱えた「英雄の旅」パターンについて考察したものである。『スター・ウォーズ』原作者ジョージ・ルーカスは『隠し砦の三悪人』に着想を得て、その宇宙チャンバラ劇を構想し、作品に深みと普遍性を与えるために『千の顔を持つ男』で神話学を学んだことは有名である。キャンベルの神話学の中でも特に重要な概念は「モノミス」(monomyth)と呼ばれるもので、それは『フィネガンズ・ウェイク』の言葉である。ところが、その言葉の説明を彼のジョイス研究書の中でキャンベルは一切していない。そこでテクストを読み返してみると、じつはその言葉はキャンベルが神話分析をする上でよく参照していてフロイトの「原光景」(primal scene)と深い関係があることが分かった。さらに「オイディプス・コンプレックス」などを絡めて、ルーカスは『スター・ウォーズ』を脚色してきた。結論として、キャンベルの「英雄の旅」は『スター・ウォーズ』のみならず、『隠し砦の三悪人』とジョイス作品、特に『若い芸術家の肖像』までかなりの程度まで分析可能にする概念・神話の原型であると論じた。

(4年目) 2017年6月にカナダのトロント大学で開催された北米ジェイムズ・ジョイス学会「ディアスポラしたジョイス」において「中国語・日本語の書き言葉におけるジョイスのディアスポラ」を発表した。ジェイムズ・ジョイスは移民の国アイルランドのディアスポラの流れの中にいた。ほとんどのジョイス研究がいかにヨーロッパ文学、言語、文学、文化が彼に影響を与えたかに焦点を当ててきた。この発表では、中国語・日本語の特に書き言葉がジョイス作品、特に『フィネガンズ・ウェイク』において使用されているかについて論じた。ジョイスが1938年に書いた、『フィネガンズ・ウェイク』で使用されているという40言語のリストでは、1番目は無論英語だが、中国語は6番目、日本語は7番目に記載されている。ジョイスはフェノロッサ・パウンド共著の「詩の媒体としての漢字考」を1919年から読み、パリでは日本人から直接漢字を教わるなどしている。また、日中戦争が激しくなった1938年に中国語を学習したメモを残している。アルファベットは発音を示す表音文字だが、漢字は古の中国人たちの物事の考え方や概念を示す表意文字である。ジョイスは表意文字を学習する過程で、『フィネガンズ・ウェイク』のテクストに資格効果を入れようと考えたのではないか。アナ・リヴィアの章(I, viii)の三角州を模った冒頭段落や登場人物の存在を示すシグラと呼ばれる記号の使用、ALPの女性器を示す幾何学図やイシーの嘲りの身振りを示す絵柄などの使用は漢字を学んだからこそ思いついたのではないかと推察した。

同年7月シンガポールの南洋理工大学で開催された第41回国際アイルランド文学協会年次大会において「イェイツ、ジョイス、ヒーニーにおける日本文学効果」を発表した。2017年は日本・アイルランド外交関係樹立60周年にあたり、研修先のダブリンでも毎年4月に開催される「エクスピアレンス・ジャパン」に例年よりかなり多い35,000人以上の人々が参加した。日本では小泉八雲という日本名で知られるアイルランド人作家ラフカディオ・ハーンの功績もあっ

てアイルランド文学研究が昔から盛んだが、アイルランドの日本文学研究はそれほど盛んではない。しかし、2000年にノーベル文学賞詩人シェーマス・ヒーニーがハーン記念講演で述べたJapanese effectという言葉を用いて、アイルランド文学にも日本、ことに俳句に影響を受けた作品が多く存在すること、そもそも８世紀のアイルランド語で書かれた短詩が俳句と多くの共通点があることなどを指摘している。本発表では、ヒーニーの講演内容に添いながら、イェイツ、ジョイス、ヒーニーの日本の影響について触れ、松尾芭蕉に焦点を当てつつ北アイルランド紛争を扱ったデレク・マホンの「雪見の宴」、さらに研究者がアイルランド俳句協会の句会で出会った俳人ショーン・オコナーの最新の俳句を紹介した。

同年8月スイスのチューリッヒ・ジェイムズ・ジョイス財団にて開催されたチューリッヒ・ジェイムズ・ジョイス・ワークショップにおいて「『フィネガンズ・ウェイク』における日本語・中国語のPostscrapt」を発表し、ジェイムズ・ジョイスがいかに中国語と日本語を学び、かつ両国の文化・歴史を自分の作品に引用・隠喩したかを論じた。イエズス会で初等・中等教育を受けたジョイスにとって、イエズス会の聖人フランシスコ・ザビエルのアジア、とくに日本での布教活動は耳慣れた物語であった。彼が英語教師として移り住んだトリエステはユダヤ人に興味を持った。そしてパリでは複数の日本人と交流し、中国にも興味を持った。彼の作品中の日本・中国関係の引用・隠喩箇所の多くは創作段階としてはかなり後の挿入であることなどを指摘した。

同年11月に大韓民国東國大學校にて開催された第2回国際比較文学学会に招待され、「デジタル・ヒューマニティーズにおけるジョイス研究と日本文学」と題して講演した。人文学(Humanities)は、昨今では世界中で衰退しつつある研究分野である。かつてはLiberal Artsとも呼ばれ、自由人としてあるいは人間として身につけるべき教養を総合的に学ぶ分野であったが、20世紀以降、大学を就職前の準備期間と考える時代のニーズに教育内容がそぐわなかったので、就職率の悪さと相まって衰退を余儀なくされた。その現状を打破すべく生まれたのが、デジタル・ヒューマニティーズと呼ばれる新分野である。コンピュータやインターネットの普及とともに生まれたこの分野は、かつては小分野ごとに独立（孤立）していた人文学にインターネットを介した情報共有と共同作業により、新たな活力を与え、衰退しつつあった人文学を再生しようとしている。本発表では、私がこれまで研究してきたジェイムズ・ジョイスやアイルランド文学、そして日本文学をはじめとする日本のデジタル・ヒューマニティーズの現状を紹介した。そのハイライトは、ボストン・カレッジのジョセフ・ニュージェント教授の指導で文系理系の枠を超えた様々な専攻の学生たちが共同開発した「ジョイススティック」というヴァーチャル・リアリティ・ゲームである。また、日本デジタル・ヒューマニティーズ学会の活動紹介と日本の誇る２つのサイト「青空文庫」と「国立国会図書館デジタルコレクション」を紹介した。欧米の先進諸国にはまだまだ追いついていないものの、現在アジアでは日本がデジタル・ヒューマニティーズの分野でトップを走っていることを確認した。

（5年目）2018年6月にベルギーのアントワープ大学で開催された第26回国際ジェイムズ・ジョイス・シンポジウムにおいて、「教育：イエズス会士の芸術家とまだらの詩人」を発表した。ジョイスの半自叙伝的小説『若き日の芸術家の肖像』とW.B.イェイツの未完の半自叙伝的小説『まだらの鳥』を両作家の受けてきた教育的環境を考慮しながら、二人の文学的才能を比較したものである。ジョイスはカトリックの中流家系に生まれ、イエズス会の教育を一貫して受けた。少年期に家族が財政破綻し、貧しい暮らしを余儀なくされたが、それでもイエズス会の教育を大学卒業まで受けてきた。一方、イェイツはアングロ・アイリッシュのプロテスタントの家系に生まれ、幼少期にロンドン近郊に移住して4年ゴドルフィン学校に通うが、理系が多少得意だったものの、自分が学校向きではないと認識し、あとは小説に書いてある通り、自宅で気ままに本を読んで自学自習した方がよいと感じていた。両者とも長ずるにつれ学業成績は芳しくなかった。また、信仰にも今ひとつ熱心さに欠けていたため、イェイツはモード・ゴンに、ジョイスはエマ・クレアリという女性にふられてしまう。また、両者とも共通しているのは、アイルランドの愛国者として、自ら武器を手に取り、同志たちと共に大英帝国と戦おうとしなかったことである。彼らの受けてきた教育の結果、独立運動やナショナリズムには距離を置くことが出来て、一貫してイエズス会教育を受けたジョイスは故郷ダブリンだけを描きつつも国際色豊かな小説家に、自学自習を好んだイェイツはマイペースで作品を仕上げていく詩人になったと論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計6件）

① Ito, Eishiro. “The Japanese Effect or *Haiku* on Irish Literature” 『英語・英文学論叢 片平』第54号 (片平会/金星堂)、2019年、pp. 15-31. (査読有)

② Ito, Eishiro. “Joyce, Kurosawa and *Star Wars*: “monomyth” (*FW* 581.24)” 『英語・英文学論叢 片平』第53号 (片平会/金星堂)、2018年、pp. 1-18. (査読有)

③ Ito, Eishiro. “Joyce to the World and Murakami to the Globe” 『英語・英文学論叢 片平』第52号 (片平会/金星堂)、2017年、pp. 1-18. (査読有)

④ Ito, Eishiro. “Reconciliation between Joyce and Yeats at the Noh Theatre” 『総合政策』第13巻第2号 (岩手県立大学総合政策学会)、2017年、pp. 89-101. (査読有)

⑤ Ito, Eishiro. “James Joyce among Modernists/Orientalists” 『英語・英文学論叢 片平』

第 51 号 (片平会/金星堂)、2016 年、pp. 21-36. (査読有)

⑥ Ito, Eishiro. “Joyce and Salinger: A Study of Their References to Buddhism” *James Joyce Journal*, vol. 21, no. 2 (The James Joyce Society of Korea)、2015 年、pp. 117-136 (査読有)

〔学会発表〕（計 10 件）

① Ito, Eishiro. “Education: The Jesuit Artist and the Speckled ‘Bard.’” XXVI International James Joyce Symposium: “The Art of James Joyce.” 2018 年 6 月 12 日. University of Antwerp, Belgium.

② Ito, Eishiro. “James Joyce Studies and Japanese Literature in the Digital Humanities.” The Korean Society of East-West Comparative Literature The 2nd International Conference in Commemoration of Its 20th Foundation Anniversary: “East-West Comparative Literature, World Literature, and Digital Humanities.” 2017 年 11 月 11 日. 大韓民国ソウル市 東國大學校.

③ Ito, Eishiro. “Japanese/ Chinese Postscrapt in *Finnegans Wake*.” Zurich James Joyce Workshop 2017: “Joycean Postscrapt.” 2017 年 8 月 4 日. Zurich James Joyce Foundation, Switzerland.

④ Ito, Eishiro. “The Japanese Effect on Yeats, Joyce and Heaney.” IASIL 2017: “Ireland’s Writers in the 21st Century” [The International for the Study of Irish Literatures]. 2017 年 7 月 25 日. Nanyang Technological University, Singapore.

⑤ Ito, Eishiro. “Joycean Diaspora in Chinese/ Japanese Written Character.” 2017 North American James Joyce Conference: “Diasporic Joyce.” 2017 年 6 月 15 日. Victoria College, University of Toronto, Canada.

⑥ Ito, Eishiro. “Joyce, Kurosawa and *Star Wars*: 'Monomyth' (*FW* 581.24).” XXV International James Joyce Symposium: “Anniversary Joyce.” 2016 年 6 月 15 日. University of London, United Kingdom.

⑦ Ito, Eishiro. “Reconciliation between Joyce and Yeats at the Noh Theatre.” IASIL 2015: “Reconciliations” [The International for the Study of Irish Literatures]. 2015 年 7 月 21 日. The University of York, York, United Kingdom.

⑧ Ito, Eishiro. “Joyce and Salinger: A Study of Their References to Buddhism.” The 6th International James Joyce Conference: “Glocal Joyce.” 2015 年 6 月 6 日. 大韓民国京畿道龍仁市器興区旧葛洞 江南大學校.

⑨ Ito, Eishiro. “Joyce to the World and Murakami to the Globe.” XXXI International IASIL Japan Conference: “Crossing Borders.” 2014 年 10 月 12 日. 早稲田大学.

⑩ Ito, Eishiro. “The Great War and Modernism: Joyce among Orientalists.” XXIV International James Joyce Symposium: “a long the krommerun.” 2014 年 6 月 17 日. Universiteit Utrecht, The Netherlands.

〔図書〕（計 2 件）

① 高橋渡・河原真也・田多良俊樹編 『ジョイスへの扉: 「若き日の芸術家の肖像」を開く十二の鍵』英宝社 2019 年 3 月. (伊東担当: 第 12 章 Education: The ‘Jesuit’ Artist and The Speckled ‘Bard’) (査読有)

② 片平会編 『片平五十周年記念論文集 英語英文学研究』金星堂 2015 年 3 月. (伊東担当: Joyce and the Jews in Two Irish Cities) (査読有)

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
[研究者サイト] Atelier Aterui: http://p-www.iwate-pu.ac.jp/~acro-ito/
６．研究組織
研究代表者
伊東 栄志郎（ITO, Eishiro）
岩手県立大学・高等教育推進センター・教授
研究者番号：70249241

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：
BRIVIC, Sheldon
米国 Temple University 教授

BROWN, Richard
英国 University of Leeds 准教授

戴从容 (DAI, Congrong)
中国復旦大学教授

金吉中教授（KIM, Kiljoong）
韓国ソウル大学校名誉教授

會麗玲教授(TSENG, Liling)
台湾國立台湾大學教授

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。